

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：26402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26780344

研究課題名(和文) 外集団に対する先制攻撃の心理基盤の解明

研究課題名(英文) Psychological basis of preemptive strike against outgroup members

研究代表者

三船 恒裕 (Mifune, Nobuhiro)

高知工科大学・経済・マネジメント学群・講師

研究者番号：00708050

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：戦争や紛争のように、人々が集団で他の集団を争う時、どのような心理が働くのだろうか。しばしば、人間には他集団を攻撃する「本能」があると主張されることがあるが、本研究によって人々が何の理由もなく他集団を攻撃することはほとんどないことが示された。一方、相手が自分を攻撃する力が、自分が相手を攻撃する力よりも強い場合、何の理由もなく他集団を攻撃する可能性も示された。

研究成果の概要(英文)：What kind of psychological process works when people in groups fight against other groups, like war? It is sometime claimed that human beings has some "instinct" to attack against other group, but current study showed that people rarely attack other groups without any reason. On the other hand, when the opponent's ability to attack oneself is stronger than the ability to attack opponents, it is also showed the possibility that people has an inclination to attack especially toward other group members.

研究分野：社会心理学

キーワード：内集団バイアス 外集団攻撃 内集団ひいき 最小条件集団 先制攻撃 個人間集団間非連続性効果

1. 研究開始当初の背景

本研究の問題意識の背景には、戦争に代表されるような集団間葛藤問題が存在する。人間は先史時代から集団を形成し、集団内では協力的な関係を築く一方、しばしば集団間では致命的な葛藤も経験してきた。社会心理学ではこうした集団間葛藤を引き起こす根本的な行動傾向として人々が持つ内集団バイアス傾向に注目し、研究が進んできた。クレアの絵を好むか、カンディンスキーの絵を好むかといった些細な基準で分けられただけの、実験室内でのみ存在する集団である最小条件集団においても内集団バイアス(すなわち、内集団への協力的行動と外集団への攻撃的行動)が生じることが多くの研究で明らかにされてきた。

こうした研究に触発され、近年では進化シミュレーションを用い、ヒトが内集団への協力的性と外集団への攻撃性を共進化させた可能性があることが示されている(Choi & Bowles, 2007)。この知見は社会科学における広範な分野に影響を与えており、心理学においても無視できない立場となっている。

一方、近年の実験研究は上述の共進化仮説を支持しない結果を報告している。人々が集団状況において示すのはもっぱら集団内への利他性・協力的性であり、外集団成員に対して攻撃することはほとんどないのである(Balliet, Wu, & De Dreu, 2014)。内集団に対する利他性の進化的基盤に関しては間接互惠性への適応という観点から説明することが可能であり、それを支持する実験結果も多く報告されている(Yamagishi & Mifune, 2008)。

謎として残るのは外集団に対する攻撃性である。進化的な観点から見ても、社会心理学における先行研究を見ても、外集団に対する攻撃性がなぜ、どのようにして生じるのか、特にその最も根本的な心理メカニズムに関してはほとんど明らかにされていない。本研究は先制攻撃という攻撃行動に焦点を当てながら、外集団に対する攻撃行動の心理メカニズムを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の目的

本研究の目的は先制攻撃ゲームを用い、外集団への攻撃行動がどのような場合に生じ、また、促進されるのかを明らかにすることにある。近年、これまでの攻撃行動研究の中ではあまり扱われてこなかった「相手が攻撃してくる前の攻撃する」という先制攻撃行動を測定する経済ゲームを開発した。このゲームでは参加者は二人一組になり、画面上に表示されるボタンを制限時間内に押すか否かを決定する。例えば、両者がボタンを押さなければお互いに1500円ずつ獲得する。ボタンを押すと、押した側は100円を支払い、押された側は1000円を支払う。ただし、結果は早押しで決まり、「お互いに押す」という結果は存在しない。従って、相手が

押さないと予測すれば自分も押さない方が得であり、相手が押すと予測すれば自分が先に押したほうが得である。申請者は既に最小条件集団を用い、先制攻撃行動における内集団バイアスを測定する実験を実施した。その結果、内集団相手と外集団相手での攻撃率に差が見られないという結果を得ている。本申請研究はこの結果を出発点とし、いかなる条件において外集団への攻撃が生じうるのかを検討する。

3. 研究の方法

本研究は外集団への攻撃行動に関して、主に二つの側面からアプローチする。

(1) 個人間集団間非連続性効果実験

先行研究(Simunovic, Mifune, & Yamagishi, 2013)では1人が相手ひとりと対戦する先制攻撃ゲームが実施された。外集団への攻撃行動を測定するにあたって、そうしたひとりがひとりと対戦する場合と、集団と集団が対戦する場合の攻撃率を比較する方法が考えられる。これは個人間集団間非連続性効果実験として知られており、囚人のジレンマゲームを用いた場合には競争的(非協力)行動が増加することが示されている(Insko, Schopler, Hoyle, Dardis, & Graetz, 1990)。本研究ではこの非連続性効果が先制攻撃ゲームでも生じるのかを検証した。実験では1人対1人、3人対3人、1人対3人でそれぞれ先制攻撃ゲームを行った。3人の場合はどのような意思決定を行うかを話し合っただけで決めた。ディセプションは用いず、相手に関する情報(相手が1人なのか3人なのか)も参加者に開示した。

(2) 最小条件集団実験

個人間集団間非連続性効果実験では内集団への攻撃性と外集団への攻撃性のどちらが高くなるのかを比較することができない。内集団相手と外集団相手の行動を比較する代表的な実験方法のひとつが最小条件集団である。この実験では、まず被験者に対して2枚の絵のどちらを好むかを判断させ、クレア集団あるいはカンディンスキー集団のどちらかに所属させた。その上で、一回限りの先制攻撃ゲームを内集団相手あるいは外集団相手と行わせた。

4. 研究成果

(1) 個人間集団間非連続性効果実験の結果

399人の学生に対して実験を行った。1人が1人と先制攻撃ゲームを行う場合(1対1条件)、3人が話し合い、同じく話し合っている3人を相手としてゲームを行う場合(3対3条件)、1人が3人を相手にゲームを行う場合(1対3条件)、その逆に3人が1人を相手にゲームを行う場合(3対1条件)の攻撃率を比較した(参加者間配置要因計画)。先制

攻撃ゲームは、元手を 500 円とし、ボタンを押した場合は押したほうが 100 円減り、押された方は 400 円減るといった利得構造であった。また、3 人集団の場合は誰か一人が代表して一つのボタンを押すが、ボタンを押して攻撃が成功すれば 3 人からそれぞれ 100 円ずつ（合計 300 円）が減り、相手に先に押された場合は 3 人それぞれから 400 円ずつ（合計 1200 円）が減るといった利得構造を採用した。それぞれの条件における攻撃率を図 1 に示す。

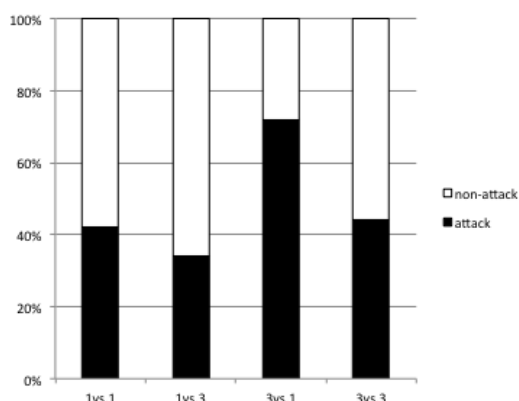


図 1 非連続性実験の攻撃率

攻撃率は 4 つの条件間で有意に異なっていた ($\chi^2(3) = 16.51, p < .001$)。1 対 1 条件と 3 対 3 条件の間の攻撃率に有意な差は見られなかった ($\chi^2(1) = 0.04, p = .84$)。また、1 対 1 条件と 1 対 3 条件の差 ($\chi^2(1) = 0.68, p = .41$) も、1 対 3 条件と 3 対 3 条件の差 ($\chi^2(1) = 1.05, p = .31$) も有意ではなかった。3 対 1 条件における攻撃率は 1 対 1 条件 ($\chi^2(1) = 9.18, p = .002$)、1 対 3 条件 ($\chi^2(1) = 14.49, p < .001$)、そして 3 対 3 条件 ($\chi^2(1) = 8.05, p = .005$) よりも有意に高く、おおよそ 2 倍程度の攻撃率を示した。この研究成果は研究代表者を第一著者として PLoS ONE 誌に掲載された。

(2) 最小条件集団実験の結果

176 人を参加者とした結果を図 2 に示す。

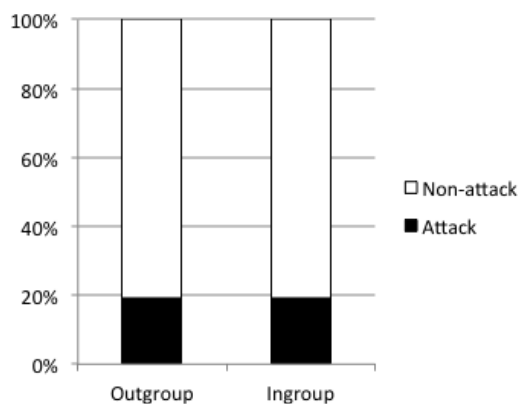


図 2 最小条件集団実験の攻撃率

外集団への攻撃率 (19%) は、内集団への攻撃率 (19%) と同じ値を示した ($\chi^2(1) = 0.00, p = 1$)。この研究成果は研究代表者を第一著者として Frontiers in Psychology 誌に掲載された。

(3) 攻撃力の非対称性

最小条件集団実験により、通常の最小条件集団では外集団攻撃が生起しないことが明らかとなった。非連続性実験により、集団内で話し合いという相互作用があり、最小条件集団よりも現実の集団に近い状況にあっても、外集団攻撃が生起しない可能性が示された (3 対 3 条件の結果より)。では、こういった要因が外集団攻撃を生じさせるのであろうか。非連続性実験にその手がかりがあると考えられる。

非連続性実験では 3 人が 1 人と対戦する場合に非常に高い攻撃率が見られた。これが生じた可能性はいくつか考えられるが、理由のひとつが攻撃力の非対称性にあるだろう。3 人が 1 人と対戦する場合、集団単位で考えれば、こちら側の攻撃が成功しても相手から 400 円しか減らせないが、相手の攻撃が成功すれば 1200 円を減らされる。この攻撃力の非対称性をもたらした攻撃の促進効果が外集団に対して特に生じるかを検討した。

実験では最小条件集団を用い、内集団相手と外集団相手への攻撃率を比較した。このとき、攻撃が成功した場合に減る金額が自分と相手で同じ場合、自分の方が相手よりも大きい場合、相手の方が自分よりも大きい場合を設けた。222 名を参加者とした実験の結果、相手の方が攻撃力が大きい場合にのみ外集団への攻撃率が内集団への攻撃率を上回り、その他の条件では内外集団の攻撃率に有意な差が見られなかった。この実験結果は日本社会心理学会第 56 回大会 (2016 年) において発表された。

この実験結果は、筆者が知る限り、通常の最小条件集団で外集団攻撃を示した世界で初めての実験結果である。今後、いくつかの条件を変更した上で追試を行い、再現性を確かめてから国際誌へ投稿する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

Mifune, N., Simunovic, D., Yamagishi, T., Intergroup biases in fear-induced aggression, Frontiers in Psychology, 査読有、Vol. 8、2017、pp. 49. doi: 10.3389/fpsyg.2017.00049

Sugiura, H., Mifune, N., Tsuboi, S., Yokota, K., Gender differences in intergroup conflict: The effect of outgroup

threat priming on social dominance orientation、Personality and Individual Differences、査読有、Vol. 104、2017、pp. 262-265. doi: 10.1016/j.paid.2016.08.013

Mifune, N.、Hizen, Y.、Kamijo, Y.、Okano, Y.、Preemptive striking in individual and group conflict、PLoS ONE、査読有、Vol. 11、2016、pp. e0154859. doi: 10.1371/journal.pone.0154859

Yamagishi, T.、Mifune, N.、Parochial altruism: Does it explain modern human group psychology?、Current Opinion in Psychology、査読有、Vol. 7、2016、pp. 39-43. doi: 10.1016/j.copsyc.2015.07.015

三船恒裕、山岸俊男、内集団ひいきと評価不安傾向との関連：評判維持仮説に基づく
相関研究、社会心理学研究、査読有、31 巻、
2015、128-134. doi: 10.14966/jssp.31.2_128

〔学会発表〕(計 2 件)

三船恒裕 (2016). 攻撃力の非対称性に基づく外集団攻撃：先制攻撃ゲームを用いた最小条件集団実験 日本社会心理学会第 57 回大会、9 月 18 日、関西学院大学(兵庫県・西宮市)

三船恒裕・肥前洋一・上條良夫・岡野芳隆 (2014) 個人間・集団間における先制攻撃 日本社会心理学会第 55 回大会、7 月 26 日、北海道大学(北海道・札幌市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

三船 恒裕 (MIFUNE, Nobuhiro)

高知工科大学・経済・マネジメント学群・

講師

研究者番号：00708050

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()